NOTEBOOK

あるべき未来に進むために

A 普通横罫 40枚 ノ-200PX

NOVEL

あるべき未来に進むために　1

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15224774

ダイの大冒険, アバン, ヒュンケル, レイラ, ロカ, マトリフ, マァム, 子ヒュン, 子マァム, 勇者アバンと獄炎の魔王

アバンとヒュンケルの出会い。

Table of Contents

あるべき未来に進むために　１

第１章　邂逅

―・・・ここは、どこだ？
　少年は目を開けたが、自分が今どこにいるのか、どんな状態なのかも把握できていなかった。
　全身がけだるい。
　彼は、ぼんやりとしたまま目に映る光景を理解しようと頭を働かせた。
　とりあえず、見えているのは天井のようだが、自分がそれまでいたところの石造りの天井とは異なっていて、木目が見えていた。
　意識を失う前、なにがあったのか。
　思い出そうとするが、頭が重く、うまく思い出せない。目も痛かった。
　ただ、なにか、ひどく嫌なことが起きたような、そんな不安が胸に渦巻き、彼の想起を拒んでいた。
　後から考えたら、これは防御反応だったのだが、このときの少年にはそのことに気づく余地もなかった。
　少年は、簡素なベッドに寝かされたまま、ぼんやりと天井を眺めていたが、不意に、耳に柔らかい声が飛び込んできた。
「・・・気が付いたのね。よかった。」
　声のする方に頭を巡らせると、長い黒髪の女性が、ベッドサイドの椅子に座ったまま彼の方を見ていた。
　少年はいぶかしげに眉をひそめた。
　誰だか分らなかった。見覚えがない。
　彼女は立ち上がってテーブルに歩み寄り、水差しからコップに水を映すと、水を満たしたコップを少年に差し出した。
「起き上がれる？お水、飲めるかしら？」
　少年は相変わらず眉をひそめていたが、喉がカラカラだったので、水は欲しかった。
　少年は、肘をついて体を起こそうとしたが、うまく起き上がれな

い。
　すると、黒髪の女性は、コップをいったん置き、少年の背に腕を入れて、彼の半身を起こし、壁にその背を持たれかけさせた。
　少年は、体に触れられたことに驚き、身を固くした。
　黒髪の女性は、少年が身構えたことに気づき、彼を安心させるように微笑んだ。
「ごめんなさいね、急に触っちゃって。大変そうだったから、つい。
お水飲んだら、また横になったほうがいいわ。」
　そう言って、彼女は水で満たされたコップを、再度、少年に差し出した。
　少年は、おずおずとそれを受け取り、しばし、水面を見つめていたが、喉の渇きには耐えられず、一気にそれをあおるように飲み込んだ。
　乾いた大地に降り注ぐ雨のように、少年の体に、澄んだ水が染みわたった。
　少年は、ほうと息を吐いた。
　黒髪の女性は、そんな彼の様子を見て、穏やかに微笑んでいた。
　不意に、ドアがノックされた。
「はい。」
　黒髪の女性が短く答えて、入室を許可する。
　ドアが開き、そこに、大柄な男が立っていた。
　男は、見たこともないような服と大きな帽子に身を包んでおり、そのいでたちとはひどく不似合いなことに、胸に何か毛布のようなものをそっと抱きかかえていた。
「戻ったぜ。」
　男が言うと、黒髪の女性は、はじかれたように立ち上がり、嬉しそうな声を上げた。
「マァム！」
　黒髪の女性は、男に駆け寄り、男の抱えていたものを受け取った。彼女はそれを大事そうに胸に抱き、愛おしそうに見つめて、頬ずりをした。
「マァム、会いたかったわ。ごめんね、お母さん、一緒にいられな

くて。」
　そして、顔を上げると、男に微笑んだ。
「マトリフ、ありがとう。」
「・・・俺はマァムの次かよ。」
　皮肉のような言い方だったが、男の顔は笑っていた。
「だって、早く抱っこしたかったから。
あー、マァム、あったかくて、柔らかいわ。」
「ルーラで行って帰ってきただけだから、なんてことねえよ。」
　男は、部屋の奥に視線を移すと、少年がベッドの上に半身を起しているのに気付き、彼に声をかけた。
「よう、坊主。目ぇ覚めたのか。」
　そう言って、少年に歩み寄った。
　少年は、警戒心をあらわにした表情で男を見上げ、身構えた。
「・・・まだ顔色悪いな。しょうがねえ。」
　男は、無遠慮に少年の頭に手を置いた。
　少年は、恐怖を感じ、その手をふり払おうとした。
「な、なにすんだ・・・！」
「じっとしてろって。」
　男の力は思ったよりも強く、少年は頭の上に置かれた手で抑え込まれ、身動きが取れなくなった。
　少年は、ぎゅっと目をつぶり、恐怖心をあらわにした。
　しかし、予想に反し、男の手からはあたたかな空気が流れてきた。
　柔らかな光がふわりと、少年の全身を包む。
　その心地よさに身を預けると、少年は、先ほどよりも、少し、体の重さが取れたように感じた。
　男がぶっきらぼうに言った。
「大魔導士様直々のホイミだ。ちったあ楽になっただろ。」
　少年の目からは警戒心が消えていなかったが、それでも、敵愾心は消え、不思議そうな目で男を見上げた。
　そのときだった。
　廊下をばたばたと走る音が響いた。
　すると、すぐに、男たちが二人、部屋に駆け込んできた。

「マトリフ、戻ったんですか？」
「マァム！元気だったか？会いたかったぜ！」
　明るい表情で、口々に言葉を紡ぐ。
　背の高い大柄な男と、小柄な柔和な表情の男。
　少年の目は、その小柄な男の上で止まった。
　彼の精神を守るために押さえ込んでいた記憶のふたが開く。
　少年の脳裏に、まるで絵画がフラッシュバックするように、いくつもの場面が静止画のまま、頭の中で再生された。
　静まり返った地底の城。
　廊下のあちこちに、見慣れたモンスターの遺骸が横たわる。
　大きな門の前にあるのは・・・崩れ落ちた骨の騎士。
　その前に立っていた、鎧に身を包んだ、少年のような男。
　その手には、抜身の細い剣が握られていた。
　服装や装備こそ変わってはいたが、間違いない。
　記憶の中の男の姿が、いま、目の前にいるこの小柄な男と合致した。
　かちりと、頭の中で何かがはめ込まれるような音がした。
　その瞬間、少年は、全身の血が逆流する感覚を味わった。
　怒りが、衝動が抑えられない。とめどなくあふれてくる。
　こいつは、この男は、勇者。
　父を殺した男。
　頭脳で理解した瞬間、少年の目は、部屋の隅に立てかけられていた1本のハンマースピアの上で止まった。
　はじかれたように、ベッドの上で立ち上がると、それを蹴り、瞬く間にハンマースピアを両手でつかむ。
「お前があっ・・・！！」
　少年は、男に向かってとびかかり、一分の迷いもなく、渾身の力でハンマースピアを小柄な男の頭上に振り下ろした。
「アバン様！」
　女の悲鳴が響いた。
　だが、小柄な男は、少年の攻撃をものともせず片手で受け止め、油断のならない笑みを少年に向けて、言った。
「・・・グッドです。いい太刀筋ですね、ヒュンケル。」

男の目の奥に、強い光があるのを、少年は感じた。
「・・・お前、俺の名前を・・・。」
「あなたが教えてくれたんですよ、気を失う前にね。覚えていませんか？」
　小柄な男は、にっこりとほほ笑むと、その微笑みに不釣り合いに強い力で、受け止めたハンマースピアを振り払った。
　少年は、その勢いで弾き飛ばされ、尻もちをついた。
　小柄な男は、少年に手を差し伸べた。
「立てますか。すみません、ちょっと力が入っちゃいました。あなたの一撃が強かったのでね。」
　少年は、男の手を叩いてはじき、自分で立ち上がった。
　それを見て、小柄な男は苦笑したが、すぐにまた柔和な表情を浮かべた。
「覚えていないようなので、改めて名乗りましょうか。
私はアバン。よろしく。」
　少年は、殺意のこもった眼で、小柄な男をにらみつけたが、彼はそんな少年の視線をまったく気にしていないかのように、言葉をつづけた。
「いろいろと説明しなければならないこともありますし、あなたも聞きたいことがあるでしょう。あなたが気を失ってから、丸２日が経っています。
ただ、とりあえず、ご飯にしませんか？お腹がすいたでしょう。」
　アバンと名乗った男は、緊張感のない言葉を口にした。

　この家の１階のダイニングには、大きめのテーブルがあつらえてあり、ある程度大所帯での食事にも耐えうる構造になっていた。
　アバンたちは、思い思いにテーブルに着くと、遅めの昼食をとることにした。
　テーブルの上には、パンとハム、チーズがそれぞれ大きめの皿に盛られており、また、各人の前には、キノコの入った熱々のスープが、椀に入れられて置かれていた。
　ヒュンケルは、大人たちに交じって椅子に座らされた。
　始めはきょろきょろと、周りの様子をうかがっていたが、やはり

空腹だったのか、少し頬を染めながら、テーブルの上のパンに手を伸ばし、ほおばり始めた。
　アバンは、その様子を見てほっとした。
　食べられるようだ。よかった。
　もともと、魔族と人間の食事に大きな差はない。ただし、モンスターは種族によって食性が異なる。地底魔城でアンデッドモンスターの父に育てられたヒュンケルが、なにを口に出きるのか不安であったが、彼の様子を見ると、彼の父は、人間の食事を彼にさせていたのだろうとアバンは思った。
　ヒュンケルは、おっかなびっくりした様子で、パンを口に運んでいたが、ふと、黒髪の女性、つまりレイラの様子が気になったのか、彼女に視線を止めていた。
　レイラは、まだ乳飲み子の愛娘を膝にのせており、その子を左腕で抱きかかえたまま、右手だけで自分の食事を進めていた。
　ときおり、レイラは、パンの中の柔らかいところを小さくちぎり、スープに浸して柔らかくし、息を吹きかけて冷ましながら、パンを娘の口元に運んでいた。
　ヒュンケルは、その生き物がなんだかよくわからなかった。姿かたちは、人間と同じだか、大きさは、レイラが片腕ですっぽりと抱えられるくらいしかない。こんな小さな大きさの人間は見たことはなかった。
　不意に、その子は、不機嫌な様子でむずかり、レイラの服を引っ張り始めた。レイラは、優しく呼びかけた。
「ちょっと待ってね、マァム。」
　そう言って、少し離れた椅子に座りなおし、ヒュンケルたちに背を向けると、なにやら自分の衣服をたくし上げて、小さな娘を抱きなおしていた。
　ヒュンケルは、その行動の意味が分からないのか、ただじっと、不思議そうにレイラの様子を見ていた。
　すると、レイラの夫であるロカが、ヒュンケルをたしなめた。
「・・・おい、何じっと見てんだよ。」
　マトリフがヒュンケルを冷やかした。
「坊主も男ってことだよな。」

マトリフが意味ありげに笑うと、ロカがヒュンケルに向ける目線が不快そうなものに変わった。アバンは二人をたしなめる意味で、名を呼んだ。
「ロカ。マトリフ。」
　原因を作ったマトリフは、首をすくめた。
「はいはい。」
　アバンは、食事をつづけながら、ヒュンケルに声をかけた。
「食べられそうですか？」
　ヒュンケルは、黙ってうなずいたが、アバンに視線を合わせることはなかった。
「スープもどうぞ。熱いうちがおいしいですよ。」
　すると、ヒュンケルは、ためらいがちに言葉を発した。
「・・・熱くて食べられない。」
　それを聞いたロカが、呆れたような声を出した。
「猫舌か？お坊ちゃんだな。」
　だが、アバンは、ロカの言葉に違和感を覚えた。
　違う。
　逆だ。
　アバンは、ヒュンケルを育てていた彼の父が、アンデッドモンスターであったことを知っていた。アンデッドモンスターは、ほかのモンスターや魔族、人間のように食物を栄養としない。人間のような食事をとる必要がないのだ。
　それにもかかわらず、ヒュンケルが、このような一般的な人間の食事に抵抗がないのは、彼の父がヒュンケルに人間の食事に近いものを食べさせていたということに他ならない。
　ただ、彼の父は、食事を必要としていなかったのだから、おそらく、ほかのモンスターや魔族の食事を分けてもらっていたのだろう。そうすると、運ぶのに時間がかかって、熱い食べ物も冷めてしまう。だから、このような、できたての熱いスープを飲んだことがなくて、熱くて食べられないのだ。
　アバンは、ヒュンケルの行動の端々から、彼のこれまで生きてきた境遇を探ろうとしていた。
　アバンは、ヒュンケルに声をかけた。

「熱いのなら、少し待ってから食べればいいですよ。慌てなくて大丈夫です。」
　そうして、アバンはヒュンケルに微笑みかけたが、ヒュンケルはアバンのほうを見ようともしなかった。
「あなたの今の状況を説明します。食べながらでいいですから、聞いてくださいね。」
　アバンの言葉に関心を持ったのか、ヒュンケルは、ようやく視線を上げげた。上目遣いにアバンを見ながら、ぎこちなくうなずいた。
「ここは、カール王国の首都です。カール王国があるのは、ギルドメイン大陸。あなたがいた地底魔城のあったホルキア大陸とは海を隔てた場所になります。」
　アバンの言葉を聞きながら、ヒュンケルは、かつて父に見せてもらった世界地図を頭に描いた。
　大陸の名前は憶えていなかったが、カールという国の名前には覚えがあった。単純に、子供でも覚えやすい名前だったからだ。
　アバンは、ヒュンケルの表情を見て、自分の言葉をある程度理解していると感じた。
「カール王国、聞いたことがありますか？」
　アバンの言葉に、ヒュンケルは黙ってうなずいた。
「そうですか。いろいろと教えてもらっていたんですね。」
　アバンは、素直に感心した。
　アバンはつづけた。
「あなたのことは、地底魔城で見つけました。
ご存じかもしれませんが、地底魔城の主であった魔王ハドラーはすでに倒れました。もう、あの城に、生きている者はいません。」
　アバンの言葉に、ヒュンケルは下を向いた。
　ヒュンケルの目に涙が浮かび、潤んだが、涙が頬を伝うことはなかった。懸命に泣くのをこらえているのだろうと思うと、アバンはヒュンケルの心情が痛ましかった。
　アバンは、ヒュンケルに言葉をつづけた。
「ヒュンケル。ここで出会ったのも何かの縁です。
あなたには身寄りがないのでしょう？なら、私のところに、このままいませんか？」

アバンの言葉に、ヒュンケルは刺すような視線をアバンに向けた。
　驚いたのは、アバンの隣にいたロカで、アバンに向かって悲鳴のような声を上げた。
「なっ・・・おい、アバン！」
「ロカ。」
　だが、アバンは、短く彼の名を呼び、その先の発言を制した。ロカの言いたいことはわかっていたからだ。
　アバンは、ヒュンケルに向かってなおも語り掛けた。
「あなたが私のところにいる、と言ってくれるなら、私はあなたに剣を教えますよ。こう見えても、私は、武芸百般なんです。意外でしょう？」
　アバンは、自慢するように片目をつぶって見せた。
　ヒュンケルは眉をひそめた。
　そのまま顔を背け、アバンの言うことを無視しようとしているようだった。
　だが、アバンは、かまわず続けた。
「先ほどのあなたの一撃、あなたの年齢にしてはいい一撃でした。ある程度の訓練は受けていたようですね。
ですが、実戦を経験していない、遊びの剣にすぎません。あれでは、誰も殺せませんよ。」
　挑発するようなアバンの言い方に、ヒュンケルは、アバンに視線を戻した。その目に、先ほどよりもはるかに強い鋭さが宿っていた。
「私なら、あなたに本当の剣を教えられます。地上の誰よりも優れた剣技をね。そうすれば、あなたは誰よりも優れた戦士になれる。あなたに素質があることは、先ほどの一撃で分かっていますからね。
どうです？私の指導を受けてみますか？
もし、あなたに、本当に倒したい相手がいるなら、ね。」
　明らかにヒュンケルをあおった言い方に、マトリフは嘆息した。
―・・・やれやれ。アバンのやつ、この坊主を背負い込む気だな。
　だが、何も言わなかった。

ヒュンケルは、アバンの挑発に、怒りの混じった眼でアバンを見据えた。そこにあるのは、怒りと殺意だった。隠されることなくあらわにされた少年の意思を、戦場で生きてきたアバンもロカも、見逃すはずがなかった。
　ヒュンケルは、押し殺した声で、アバンに呼びかけた。ようやく発した言葉だった。
「・・・本当に、誰よりも優れた戦士になれるのか？」
　アバンは、自信ありげにうなずいた。
「もちろん。保証しますよ。」
　ヒュンケルは意を決したように、口を開いた。
「・・・なら、教えてくれ。あんたの剣を。」
　アバンは、満足げにうなずいた。
「わかりました。」
　そして、アバンは、ヒュンケルにたしなめるように言った。
「それなら、今日から私はあなたの先生です。あんた、じゃなくて、ちゃんと『先生』って呼んでくださいね。」
　ヒュンケルは、不愉快そうな顔をしたが、アバンは気にも留めなかった。